紙と私

紙一重の重み

羽生善治

小学校一年生の時に将棋を覚えてはじめて親に買ってもらった本が大山康晴十五世名人の入門書です。その一冊でルールを知り、戦法を覚え、囲いを学びました。新しい本を買ったらそれを暗記して、将棋クラブに行った時に実戦で試してみる、そんな日々でした。

子供なので内容は全く理解をしていなかったのですが、本当にうまく行くのか実験をしているような気分でもあったと思います。ただ、本が来れば新しい事を知ることが出来てそれを考える事が出来るというのは十歳の時でも十分に刺激的な事だったのです。

将棋のプロを目指す事になったのは中学生の時です。東京・千駄ヶ谷の本部へ行く機会が増え、同時に移動時間も飛躍的に多くなりました。実家からの往復三時間は本を読むのに格好の時間です。

最初はアガサ・クリスティやエラリー・クイーンなどの推理小説を好んで読んでいました。スリリングな展開や意外なトリック等は時が経つのを忘れさせてくれました。

十五歳の時に四段に昇段して、大阪での対局や地方でイベントに出演するために更に移動時間が長くなりました。他にすることがあまり無いという事もありますが、本に触れる時間も更に増えました。高橋源一郎さんや城山三郎さんの本などをよく読んでいたような気もします。もっとも疲れて眠ってしまう時もよくありましたが……。

二十代になると本屋に行く機会が増えました。気分転換として様々な本を見るのは楽しいですし、書店にも色々な個性があってそれを知るのも面白い事でもありました。遠征で帯広に行った時に広大なスペースを持つ本屋があり、ここにいればいくらでも時間を費やせると思ったと同時に、こんなマイナーな本まで置いているのかと感心をした記憶もあります。

稀に海外で将棋の対局が行われることがあり、その時には空いた時間に一度は本屋に立ち寄る事にしています。しかし、どこに行っても日本のような品揃え、質がある場所はありませんでした。

最初は行った国の出版事情が良くないのかと思っていたのですが、数が増えて行く内にこちらのほうが普通で、日本の方が格別に恵まれている事に気が付きました。また、近年では日本のマンガが大きく席捲している事に驚かされます。

将棋のデータ管理においても以前は棋譜をコピーしてそれを盤に並べるのが普通だったのですが、データベースが出来てから、パソコン上で鑑賞をすることも可能になりました。もちろん、それを使って調べたりしますが、それでも大事なものはコピーして保管をします。

現在でも公式戦の終了後には記録係が棋譜をコピーして対局者、観戦記者、関係者に渡すのが習慣となっています。

デビュー当時は*青焼きコピーの時代（二十代以下の人達には通じない言葉かもしれません）だったので現在では退色して読みづらい状態になっているのですが、それが年月の重みも感じさせてくれます。このような感慨はデジタルに移行してからは無いのかと思うと少し寂しいような気持ちにもなりますし、紙一重の重みを知ることがどんな事でもリアリティを感じる要諦だとも思っています。

*青焼き：かつて主流だったジアゾ式複写技法のこと。光の明暗が青色の濃淡として写るため、"青焼き"と呼ばれた。機械図面や建築図面の複写にも多く用いられた。

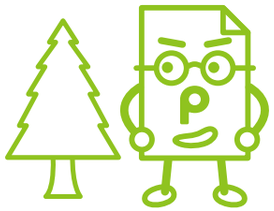
はぶ・よしはる●1970年、埼玉県生まれ。85年、中学3年でプロ棋士としてデビュー。89年、初タイトルの竜王位を獲得。93年、史上初の1億円棋士になる。96年、王将位を獲得し、名人、竜王、王位、棋聖、棋王、王座と合わせて七大タイトルすべてを独占。将棋界始まって以来の七冠達成として大きな話題に。近著に、『もっと羽生流!初段+プラスの詰将棋150題』『迷いながら、強くなる』など多数。

photo : Shiro Miyake

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐(き)ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒れ地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



〈8年で成木となる樹種の植林例〉

土地を分けて1年ごとに植林。8年サイクルで収穫・植林をしています。

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 http://kamitsubu.com/

◆次回は７月３日号、桜木紫乃さんです。